

## 日本人女性の幸せ

### ～「幸せ＝結婚」はもう古い？～

ライター：野口萌、佐藤萌、猪俣ひろか、加藤明、佐藤山葉、濱田真優、松本佳吾

エディター：野口萌

#### ①

日本人の結婚願望は弱いのか。

少子高齢化の原因の一つとして晩婚化、非婚化が挙げられ、社会問題となっている。しかし、日本人の若者の9割は結婚願望を持っており、結婚したくてもできない状況が現代日本なのである。

1995年に生まれた女性の生涯未婚率は20.1%(国立社会保障・人口問題研究所の2011年調べ「日本の将来推計人口」による)であると予測され、1960年生まれの女性の9.4%と比べて非常に高い。また、3人に一人は生涯子どもを持たない、というデータもある。

「生涯独身で過ごすのか、家庭を持つのか、その選択は個人の自由だ。しかし知識不足やライフプランニングが不十分なために、家庭を持ちたかったのに持てなかった、子どもを産もうと思ったときには遅かった、というのは、あまりに「もったいない」生き方をしている。」

そう話すのは少子化ジャーナリストとして講演や著作活動をする白河桃子さん。彼女は著書『「産む」と「働く」の教科書』の中で、現代社会を『ベルトコンベアのない時代』と表現している。現在の大学生の母親世代では、『ベルトコンベア』のように「就職、結婚、出産」という女性の人生の一連の流れが滞ることのないよう社会がお膳立てしてくれたが、現在の大学生にはその「流れ」がもうない。その理由は、誰もが正社員になれる時代が終わり、経済的な苦しさから、子育て後に復帰したいという希望年齢が早くなったことを挙げている。このほか、5つの障害がかつての女性たちのベルトコンベアを阻害している、という。

一つは転職だ。就職で不本意な企業に就職してしまった、あるいは理想の職業を追及する女性たちは転職を試みる。転職が終わるまでが彼女たちの就活であり、就活を終えるまで「婚活どころではない」。

二つ目は「出会いがないから」である。かつては職場内結婚が多かったが、就職氷河期からそれも衰退し、もはや職場は出会いの場という特徴が薄れ、親同士の勧めによるお見合い結婚など地域ぐるみの協力関係も弱体化し、結婚が当たり前でできる環境ではなくなった。だからこそ、現代の女性たちは受け身ではいけない、と白河さんは力説する。現代の女性たちは会社と家の往復だけでは今では良き伴侶に出会えない。会社以外の場所にも積極的に足を運び、出会いのアンテナを張らなければならない。

三つ目は、未産である。かつての「寿退社」時代はもう終わり、今は結婚後も夫婦共働きの時代である。仕事の忙しさや様々な理由で子供を産む機会を先延ばしにし、ついに

は逃してしまう人がいるのは無理もない。

四つ目は高い離婚確率だ。現在離婚するカップルは三組に一組である。結婚したとしても安泰とはいえないこの時代だからこそ、女性も仕事を辞めずに続ける必要が真の安心のために必要なのだ。

五つ目は夫の収入の低下、リストラ確率の向上などである。経済難が続く現在の日本では、男性のみの片働きというライフスタイルは、家庭生活を維持する上で大きなリスクを孕んでいる。

これらのことを背景に、女性の『人生のベルトコンベア』はなくなったと白河さんは述べる。

仕事、結婚、子ども。女性の人生には若いうちに越えていかなければならない壁が多くあり、その一つ一つは親世代のように、たやすく手に入れられるものではない。東京に住む女性（25～34歳）の結婚相手に求める年収は600万円以上であるが、実際600万円の年収を稼いでいる男性はわずか5.7%だ。また未婚男性の6割が自分の収入だけで女性を養う自信がなく、結婚後も妻に働いて欲しいという願望がある。白河さんは、女性が結婚し家庭を持つためには、まずは自活できなければならない、と強く主張する。現代社会では、きちんと働くことで初めて結婚、子どもを授かることへの道が開けるという。それは女性にとっての焦りやプレッシャーでもあるかもしれないが、同時に女性が自分の人生を自分の手でどのようにでも豊かにしていけるということでもあるだろう。

②

それでは、「就職、結婚、出産」というベルトコンベアがない時代、親世代をロールモデルにできない現代の私たちは、どのようにライフプランニングをしていくべきだろう。人生設計する上で大切なことは何だろうか。この大切なヒントを提供する団体がある。

mamma は“女子大生が5年後安心して母になれる社会をつくる”をコンセプトに活動している。この学生団体は、女子学生に仕事とキャリアを絡めて考える機会が持てるよう、「家族留学」という企画を打ち出している。

女子学生が、将来仕事と子育ての両立ができるように、実際に仕事を持ち子育てもしているママのいる家庭に一日密着（「家族留学」）して、そのリアルライフを疑似体験するというものである。mamma と提携している家庭の多くが、お子さんのいる共働きのおうち。今回、若杉菜奈子さんの家庭で、弊団体エディター兼ライターの野口萌は、2015年2月28日に「家族留学」を体験した。若杉菜奈子さんは、慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、メルセデス・ベンツ日本株式会社に就職。8年ほどの勤務を経て一橋大学大学院のMBAを取得。転職し昨年の9月から Amazon Japan の HR Leadership Development Program に勤務しているバリバリのキャリアウーマン。それでいて二人のお子さん（長女（5歳）長男（9か月））の子育てと両立しているまさにお手本ママそのものだった。

この経験は、今まで漠然としていた家庭生活を一気に具体化させ、ライフプランを考えていく上で大変役立った。一家庭のみの「留学」だったが、様々な家庭への「留学」は多様なライフスタイルを知るという点で、より具体的に自分にとって理想的な働き方、家庭生活、子育てをイメージできるようになる。実際野口は、若杉家への「留学」を経て、女性にとって、人生のパートナーを含めた周囲の環境が重要であることを再認識した。若杉菜奈子さんの夫は彼女の仕事に理解があり、料理・洗濯を積極的に分担する。「家族留学」した次の日に若杉菜奈子さんはアメリカに出張予定であったが、そういった仕事が入れば夫の実家の両親が孫の面倒を代わりに見るなどサポート体制が整備されている。大学卒業後まもなく結婚し早くに出産、祖父母も孫の面倒を見ることができるくらい若いゆえに成り立つ図式だ。ライフプランニングが図らずも成功したのかもしれない、とはにかみながら若杉菜奈子さんは成功の秘訣を教えてくれた。

結婚と出産。キャリアと同じように人生における重要なエッセンスなのに、キャリアについては企業インターンや OBOG 訪問など、事前に知るチャンスはあっても、結婚や出産に関してそういった機会はまずない。新居日南恵さんは、女子学生にキャリア、結婚、出産すべてについて学べる OBOG 訪問形式の機会を提供すべきでは、という発想から mamma を昨年立ち上げた。

彼女は現在慶應義塾大学 3 年生。人生においてベターな進路選択をする上で、とにかく人と会うこと、そして自分にとって理想的なスタイルを具体化していくことが役立つという。より多くの家庭と提携して女子学生に多様な経験を提供できるよう、mamma 代表として講演や媒体を通じて団体の認知度を高めるべく積極的に活動している。

③

今まで、少子化ジャーナリストの白河桃子さんや子どもを持ちながら働くという女性の生き方を考える機会を提供し続ける mamma 代表新居日南恵さんなど、少子化問題に最先端で立ち向かう女性たちの考え方を紹介してきた。最後に、世の中の大学生にスポットを当て、彼らの視点から女性の晩婚化・未婚化について考察することにする。慶應義塾大学の男性4人と女性4人の計8人を対象に、結婚と出産、ワークライフバランスに関する意識調査を行なった。結婚や出産をまだ経験していない彼らの、現時点での理想、その理想と現状のギャップを探ることが今回の意図だ。

まず注目すべき点は、回答者の全員が、結婚と出産の意思を示し、かつ男女それぞれ4人中3人が自分は結婚できると思うと回答したこと。晩婚化や未婚化が現実問題にあるにも関わらず、これから結婚や出産を控える大学生の理想は実にポジティブだった。また結婚と出産は密接に関係し、回答者の多くは子供が欲しい、という理由で結婚を希望している。ではなぜ少子化が生まれるのか。結婚したくても結婚できない、また、子供をつくりたくてもつけれない環境があるに違いない。調査結果から、結婚後、出産後の女性の社会復帰について、男女では大きく認識の差があることが明らかになった。

女性回答者の全員が社会復帰を希望したのに対し、男性の回答者1人を除いた3人が女性の社会復帰に対し消極的な意見を示した。理由としては、第一に特に出産後、

「女性には育児に専念してもらいたい」、「将来就きたい仕事が忙しくなりそう」、また「自分一人の収入で経済的に家族を養う自信があるため働いてもらう必要はない」と述べた回答者もいた。一方女性の回答者の全員が、金銭の必要のみならず働くこと自体に意義を感じ、育児休暇は利用しても仕事を辞める意志はないという回答をした。この違いが、近年の女性の社会進出に伴う女性側の人生観の変化と、その変化についていけない男性が持つ少し時代遅れな女性観というずれであり、またこれがきっかけになってもともと結婚や出産の意思はある男女間に意見の対立を生み、非婚化や晩婚化の現状をもたらしているのではないだろうか。それを裏付ける証拠に、夫婦間における家事分担に関する質問の回答では、理想とする比重には男女間の回答で驚くほどの差異が生じた。男性側は女性の社会復帰を推奨した一人を除いて、自分は2割を、女性にはその4倍の8割を担って欲しいと期待する一方、女性の全員は時間のある方が家事をするという前提で回答者の半数が、男性側の希望の2倍の分量となる4割を男性に担って欲しいと願っている。出産や育児に夫婦間の協力は最も不可欠であるにも関わらず、これでは両者の間に納得できる協力体制が構築できないのは目に見えている。逆にいえば、そういった人生観を同じくするパートナーに巡り合えた女性こそ、事前のライフプランニングによりキャリアも子供のいる「幸せ」も手に入れることができる。

ここで、このアンケートで回答を依頼した対象者は、慶應義塾大学の学生のためのサンプルであり、決して世の中の意見を代表してはいないことを強調する。このサンプルではたまたま男性は現在の不況の時代においても自分の将来に自信があり楽観的で、女性は就

職願望が人一倍強い。以上のことから今回のアンケート結果は、「男性の収入では家族全員を養うには不十分であるため、現代の女性は働かざるを得ない」、という一般的な主張とは一線を画す。そのため今回の結果は「大学生の生の声」と一般化せず、あくまで一例として取り上げるにとどめたい。

女性が仕事と結婚、出産をすべて手に入れるにはどうすべきなのか。これまでの三種類の取材や記事作成者全員でのディスカッションにより、その方法が見えてきた。それは、仕事復帰などに関する人生観が一致した人生のパートナーとまずは巡り合い、結婚する前に一緒にライフプランニングをするということだ。仕事が続けられれば満足だ、バリバリ働くのは私のしたいことではない等女性の生き方は十人十色。どんな人生を生きるかは個人の自由だが、自分の人生を自分の思い描く理想に近づけるためにも、試験前の勉強や大会前のストレッチのように、ライフプランを立てて自分の人生を歩む「準備」をすることが必要不可欠なのだ。人生は思い描いたようにはなかなかいかないけれど、しっかり「準備」をしたら失敗しても悔いは残りにくいから。現代に生きる「結婚、出産、キャリア」すべてを手に入れたい欲張りな女性のみなさん、奥さんと共に働く家庭を築きたい未来の旦那さんたち、きちんとライフプランニングして『幸せ』つかんでみませんか？